

日本においても、明治八（一八七五）年に医術開業試験に「齒科」で受験した小幡英之助の試験問題の一項に「ハッチンソン氏齒に関することを問ふ」とある。小幡はこれに合格し、同年十月二日付で免状を下附された。したがって日本にはすでにハッチンソンの三主徴については紹介されていたことである。

（日本歯科大学新潟歯学部）

## 『聖濟総録』における歯牙疾患の分類

戸 出 一 郎

『聖濟総録』は北宋政和年間（一一一一～一一二七）に政府により編纂された医学全書である。戦乱のため金・元の時代になって校定刊行されたが、その後中国では大部分が散逸した。

日本では天文十六年、吉田意安が入明し、四年後、元刊『大徳重校聖濟総録』二〇〇巻をもち帰った。本書は文化十一年（一一八四）に日本で刊行され、日本聚珍版と称し、近年これを底本として中国で刊行された。

『聖濟総録』一一七巻から一二二巻までは口齒門で、そのうち一一九巻から一二二巻までが歯牙疾患の記述である。歯牙疾患は次の一六項に分類されている。

牙齒歴蠱・牙齒疼痛・齒蠶・虫蝕牙齒・腎虚齒風痛・齒風腫痛・齒斷腫・風疖・齒間出血・齒斷宣露・齒齲・牙齒

動搖・牙齒黃黑・牙齒不生・牙齒挺出・措齒

齒牙疾患の分類はおおむね『諸病源候論』(以下『病源』)によつてゐるが、腎虛齒風痛・風疳・齒斷宣露・措齒は『病源』にない。逆に『病源』にあつて『聖濟總錄』にない項は、牙痛候・齒痛候・牙虫候・齒虫候・齒漏候・齧齒候・齒音離候・齒齧候・抜齒損候である。

牙痛候と齒痛候を採らなかつたのは牙齒疼痛の中に両者を包含すると考えたからであらう。『病源』では牙齒痛候・牙痛候・齒痛候の三候を列記してゐるが、牙齒痛候があれば後の二候は不要である。牙虫候・齒虫候についても同様である。その他の症候については他の症候と共通するものか、あるいは頻度が少ないために省略されたのであらう。

牙齒疼痛の説明は「論に曰く、牙齒疼痛に二あり。手の陽明脈虚し、風冷これに乗じて痛むもの、これを風痛といふ。虫、齒根に居り侵蝕やまず、余齒に伝え受けて痛むもの、これを虫痛といふ。二者同じからず。古方に塗付・漱溲の薬あり。風を去り虫を治す。これを用うるに各々法あり」とある。

これは『病源』に「陽明の脈虚すれば牙齒を榮する能わず。風冷傷る所となす。故に疼痛するなり。また虫あり。牙齒を食すれば則ち齒根に孔あり。虫その間に居る。また伝え受けて余齒また皆疼痛す。これ則ち針灸にて瘥えず、薬を付すれば虫死して乃ち痛みやむ」とあるのを引用し、同時にその意味を説明したものである。『病源』に並記されている経絡説と虫蝕説はまったく別の系統の病理論で、治法もまた両者は異なるものであることをいっている。

風と虫との関係は虫蝕牙齒の項でさらにふみこんで説明される。

「論に曰く、字書にいう。凡て動くものは皆風と、虫は風を以て化す。蓋し手の陽明の支脈は齒に入る。その経虚損し、骨髓榮せざれば風邪これに乗じて齒に攻入し、毒氣と湿と相搏ちて虫を生ず。故に虫蝕牙齒というなり。その状、齒根に窺あり。或は疼痛をなす。甚だしきは則ち揺動宣露、浮腫し瘻をなす。世俗また呼びて蚰牙となす」とある。

風湿相搏つて虫を生じたのだという。『病源』では風・

虫を、同一症候における別個の病因として並べているだけであるが、本書では五行説に基づいて風・虫の関係を考察し、両者並立の意味を理論的に説明している。

牙齒歴蠱・牙齒黃黒・牙齒不生は、『病源』ではいずれも手足の陽明經に風冷の邪が入ることによって起るとしているが、本書では腎または腎氣の虚によるとし、陽明經は挙げていない。さらに腎虚齒風痛の項では足の少陰經(腎)の虚によって寒冷刺激による齒痛が起るようになる」と述べている。これは内經の医説に基づく説明である。

さらに編者は措齒の項を設け、予防衛生の重要性を説いている。

上述のように『聖濟總録』の編者は齒牙疾患の分類にあたり、『病源』を基準としながら『病源』のもつ矛盾を正し、重複をさけ、不備を補い、經絡を明確にし、臨床的に合理的な分類にしようと努めているように思われる。編者がかもつとも重んじたのは内經の医説であろう。

臨床的立場から見れば、『聖濟總録』における齒牙疾患の分類は『病源』や宋初の『太平聖恵方』よりも一段と優れた合理性をもっているように思われる。また本書の分類

と医説は後世に大きな影響を与えている。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)